



エネルギー・資源学会  
東大エネルギー・システム  
インテグレーション  
社会連携研究部門

2050年のエネルギーと社会  
そして前に進むために  
2022年度第1回シンポジウム

パネルディスカッション(1)  
2050年のエネルギー供給：  
電力部門を中心に

2022年4月22日(金)

# パネル資料

## ～統合コスト・系統モデルについて～



京都大学大学院 経済学研究科  
再生可能エネルギー経済学講座  
特任教授

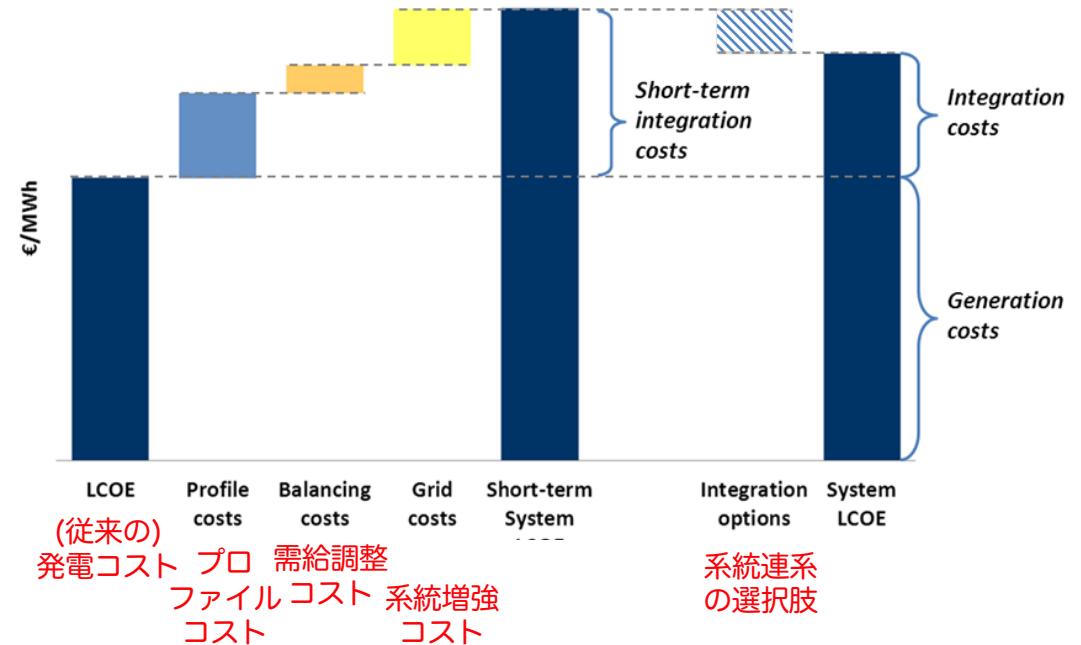
安田 陽



# 統合費用Ueckerdt原論文より引用



- That does not mean that optimal shares of VRE are low in particular when negative externalities like climate change and further benefits of VRE are internalized.
  - 【安田仮訳】このことは最適なVREシェアは低いことを意味するものではない(特に気候変動などの負の外部性やVREの便益が内部化される場合)。
- However, achieving high shares of VRE might need considerable carbon prices as well as strong nuclear capacity restrictions or significant renewables support.
  - 【安田仮訳】しかし、高いVRE シェアを達成するためには、相 当の炭素価格に加えて、原発の 容量を強く制限したり再エネを 強力に支援することが必要にな ることがある。



# + 科学的推論とその検証

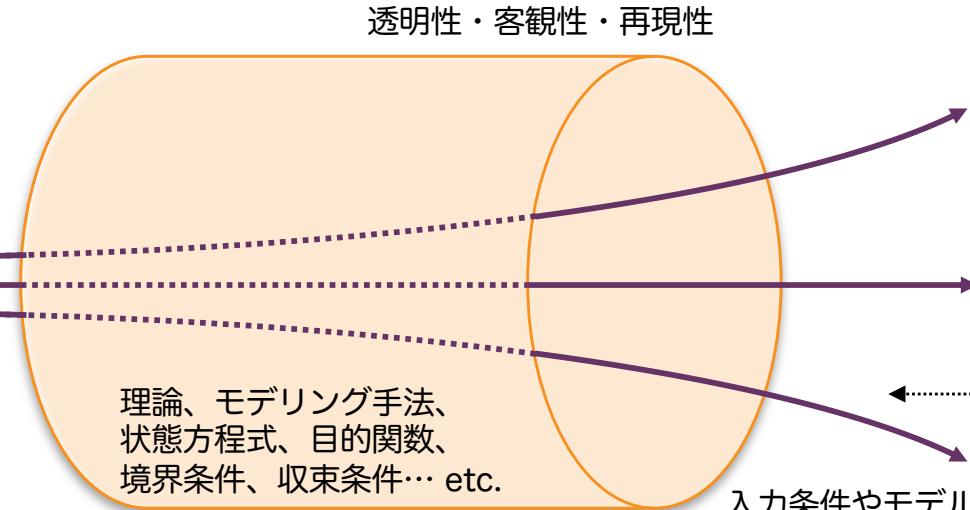
安田陽 (京都大学)  
CC-BY 4.0  
2020年4月22日



入力

推論

結果



仮説A

仮説B

仮説C

仮説には不確実性があることを理解  
(可能性表現が使われる)

結果でなく方法論を重視。  
なぜ結果が異なるのかを吟味。

科学的方法論

非科学的発想



不正確なデータ・  
エビデンスの不在

?

論理の断絶・飛躍

断定X

断定Y

なぜか威勢のいい  
断定調が多い

結果のみに拘ると  
単なる好き嫌いの  
二元論になりがち